

あとがき

「私の画廊—現代美術とともに—」を刊行するにあたって、その経緯などにつき、一言申し述べておきたい。

四年前の昭和五十三年三月、ぼくが画廊をオープンする際、それを記念する意味で、それまでに書いた美術関係のエッセーをとりまとめ「知命記—ある美術愛好家の記録—」二千部を出版した。この本はぼくが取扱う現代美術について大方の理解を得ようとする一面と、ぼく自身を知ってもらう一面—彼の現代美術に対する理解の程度はこの程度か、と知ってもらう意味をも含めて—とを兼ねたPRの本である。ぼくはこの本を大型名刺と称して活用して来たのである。ところがこの「知命記」が好評(!?)のためか、残部あと僅かであることを知り、再版を考えたのである。

再版する場合、ただ単に版を重ねるのでは面白くない。一方、ぼくは画廊開設以来主な展覧会のカタログにエッセーを書いており、他誌への寄稿分を含めると十三編に達している。そこで新たに「ノワイユ夫人とフジタのはなし」「最近の絵画市場と新しい絵画」、「わが画廊経営実感論」の三編を書き下し、併せて第三部「ポストカード 29—四年間の歩み—」と題して再版に追加することとしたのである。“ポストカード 29”と題したのは、開廊以来現在までに展覧会を二十九回行い、二十九枚の案内状を作成し、発送したからである。

なお、巻末にはこの四年間に催した当画廊の展覧会の一覧表および当画廊所蔵のカタログ・レゾネ(レゾネに準ずるカタログを含む)—〇六冊の一覧表を収録した。

改めてこの本の構成を説明すると次のとおりである。

第一部 — 「ピカソ以後」(一九七〇～七一)農林中央金庫の社内報「共助会報」に連載したもの

第二部 — 「美術の散歩道」(一九七六～七七)フジテレビギャラリー機関誌「ギャラリー」に求められて寄稿したもの

第三部 — 「ポストカード 29—四年間の歩み—」

以上の三部は、それぞれそれを書いた時のぼくの事情立場が異なる。第一部は銀行員で完全な美術愛好家の時代のもので、第二部は南画廊に勤めていた時代のものであり、第三部は自分で画廊を経営していて書いたものである。しかし一貫しているのは変ることなき現代美術との付き合いである。十五年前と今とではいろんな点で考え方や評価も変わってきている。訂正または抹消したい個所なしとしない。また論点の重複もみられる。けれどもすでに書かれてしまったものは誤字、脱字以外は敢えて一切手を触れなかった。その時、その時の時点でぼくがそう考えていたことは間違っていたとしてもそれはそれで致し方のないことである。歴史とは訂正のきかぬものなのである。それを背負ってこれからの新しい歴史を歩むほかないとぼくは思っている。

この四年の間に、もっとも衝撃的な出来事は、南画廊の志水楠男さんが亡くなったことである。南画廊即志水さんの存在を除いては戦後の日本美術史は極めて貧困なものにならざるを得ない、とするのは大方の認めるところであろう。それだけの仕事を志水さんは勇猛果敢に情熱的に取り組まれてきたのである。それができたのは志水さんが極めて強烈な個性的な性格の持主であったからこそ、できえたことであると思う。ぼくはもうすこし離れた立場で志水さんと接することができればよかった—その発する光の余りの強さの故に一と思う。改めて、志水さんの御冥福をお祈りする次第である。

さて、これからもぼくは出来得る限り優れたいい作品、面白い展覧会をみていただくよう努力して行きたいと思っている。「現代美術」の古典から最新の絵画まで、「私の画廊」で。

昭和五十七年三月二十五日

佐谷和彦